〝鉄砲小路〟の水稲早期栽培

―それはまさに「革命」であつた―

菊池郡菊陽村下堀川では……

「鉄砲小路」と云つてもしらない人が多い。豊肥線原水駅からほど近い北寄りの七〇戸程の部落がそれだ。その昔細川藩の屯田兵とでも云う人々が、各人三町五反の土地をここに貰つて住みついた処。各農家が同じ規格で、山、屋敷、耕地と整然と並んだ部落の型態は珍しい。然し乍ら、水田は上流の村々が用水を使用すればここまで使えるだけの水は来ず、殆んど〝水は天からもらい水〟という極めて不安定な水田経営の実情であつた。この鉄砲小路が、県の重点施策の一つとして推進してきた「水稲の早期栽培」を今年度はじめて実施した結果従来反収二俵という劣悪田から一躍三倍の六俵半弱という増収ぶりに、さきの県早期栽培競作大会では、その技術指導に当つた菊陽村役場、原水農協、菊池東部地区農業改良普及事務所の三者には大会唯一の指導賞が授与されるという輝やかしい成果を挙げたのである。

収穫前の麦を鋤込み

話は五月のはじめにさかのぼる――遠く阿蘇の噴煙が初夏の空に真すぐのぼつている或る日、下堀川の第三班長本田さんは、あと十日もすれば刈り取れるという麦をバリ〳〵と田に鋤き込んでいた。

「勿体なかなあ。四反三畝も早期栽培にするごつしたが、コラアしもうた事ばしたていうこつになりはせんかなあ。」

バリ〳〵と麦の鋤き込まれてゆく音に、本田さんの胸はしめつけられる思いだつた。

だが十数回開いた部落の寄合で改良普及事務所の人々の言つた言葉も忘れられない。「これからは上流で水を使わない時にこちらで利用しようというのです。早期栽培は台風よけのためとかその他色々な狙いもありますが、ここでは先づ水です。」水ときいて本田さんも早期栽培をやつてみようと決心したのだつた。

……

改良普及事務所と役場では二月から三月四月と水稲早期栽培を熱心に奨めて廻つたが誰も信用しなかつた――というより新しい技術に対する危惧の念で二の足を踏んだのだつた。やつと区長さんを先頭に、ダマサレタと思つてやつてみようと腰をあげたが又難問題にぶつかつた。技術陣は五月中旬までに田植をすまさねばならないと云う。では麦刈り前だ。せつかく稔つた麦はどうする？　改良普及事務所の菊池主任はじめ役場の大山勧業主任、普及員の人々は田に鋤き込む事を奨めた。――そこで遂に本田さん達は麦の稔りを惜しみつゝ田に鋤き込んだというわけだ。「そん時は涙の出たですバイ。」と区長さんや第二班長の佐藤さんもしみじみ述懐した。こうしてやつと水田七町五反が早期栽培の水田と化したのである。

収穫が一躍三倍に

作業は区長さんを中心に三班にわかれてすべて共同作業。技術陣に加えて、農協では資材、機具などを技術陣と緊密な連絡をとりつゝ整えた。部落の人々はその後は技術陣の熱意に動かされ、絶対の信頼を以て指導のとおりに動いた。

第一の効果はすぐやつてきた。この附近一帯は六月十日前後は反当り「一一〇人手間」を要するというタバコの第一回収穫期だ。これまでは普通作の田植と一緒になつて猛烈な忙しさだつたが、これが今年はなくなつた。

幸い台風の被害も大した事なく、八月の収穫期。たわわに稔つた稲の穂は重たかつた。これまで自分の田では手にした事もなかつた豊かな稔り。玄米一升の重さは三九六匁というから普通作と変らなかつたし、二俵しか穫れなかつた田から六俵半も穫れた。県の競作大会にも応募したが、「多収穫賞よりこつちこそ本当の意味での増産ですバイ」と鉄砲小路の人々の鼻息は荒い。

或る農家では労力の配分ができる様になつたうえ後作に飼料作物をつくれるので乳牛と豚を飼い始めた。その結果堆肥は増産できるし「一石何鳥でしようか」と笑つていた。

又区長さんは「麦を鋤き込んだ時は惜しかつたが、後作のソバで麦の代金は立派にとれますよ。その上田は肥えるし、ソバの後作には緑肥作物もつくられるし……」とこれも嬉しそうだ。「今年の成績が予想外よかつたので、来年は十二～三町歩に増やし、田植はもつと早く五月一～五日頃やりたい」と大山勧業主任は云つている。又隣接村との水の配分計画さえうまくゆけば、菊陽村だけでも一五〇町歩の畑の水田化が可能だとも力説していた。

然し、まだ今年始めたばかりの早期栽培だ。まだまだ排水路などの色々な難関が前途に横たわつているが、人々の熱意はやがてこれを解決してゆくであろう。

部落を一巡すれば、早期栽培の後作には、すでに秋馬鈴薯、白菜、甘藍、ソバなどが秋の日を浴びてすくすくと伸びていた。

水稲早期栽培の後作に白菜をつくつた。前方には普通作の水稲が稔つている。

大きい早期栽培の効果

こうしてゆいしよある鉄砲小路の〝水稲革命〟は大きな成果を収めたのであるが、その直接的な効果は、

①作柄が安定し増収した。

②共同作業を行うので、各農家の作柄が平均化した。又、資材、労力配分その他技術指導や病害虫防除上合理的となつた。

③後作により反当り現金収入が増加した。

④労力が軽減され、労働ピークを排除できた。その為畜産への進出が可能になつた。又、婦人の労働過重が著しく軽減された。

⑤後作の畑の病害虫（菌）が死滅した。などであるが、このほか副次的効果も見のがせない。

①農家が科学的な考え方で農事に臨む様になつた。

②技術的指導陣に対して全面的な信頼と親近感を抱く様になつた。

③今度の経験により、技術陣自らは、自らの立場の重要性を一層感ずる様になつた。

④技術指導陣――改良普及事務所、役場農協――三者のチーム・ワークの重要性を認識した。

⑤農業経営全般に対する改革、ひいては畜産、特産物への進出が考えられ始めた。

等々数えあげたらいくらでもある。

このほかに

①台風、旱魃害、高温障害、秋落、根腐れ、イモチなどの障害を避け、

②秋の乾燥時期に灌漑水路、農道の整備区劃整理ができる事なども大きな効果だ。

県下の早期栽培はこうして普及した

熊本県の水稲早期栽培は昭和二十八年熊本農試本場と天草分場で試験に着手して以来、特に天草地方で発展し、昨年度はこの地方だけで約三〇〇町歩にも達した。中でも有明村下津江の松崎満正氏による日本一米作増収躍進賞九州ブロック入賞（反当三石九斗八升）は本県の早期栽培の前作に明るい希望をなげかけたものと云えよう。

県でも過去の試験成績と実績に基いて水稲の早期栽培を県政の重点の一つとして、今年度から強力に推進しているわけである。

今年の成績は

現在県下の普及面積は水稲一、八二八町歩、畑作四二七町歩、二期作一〇六町歩合計二、三六一町歩で、今年の収穫もほゞ予想の成果を挙げ得た。大体坪刈りで四石近い実収をみている。中には天草地方で四石以上穫つた人がかなりみられる。

代表的な部落の実績をみると、天草郡有明村上津浦下津江では、農家数四三戸水田二〇町歩で三一年から水稲の早期栽培を全面的に始めたが、供出量をみると（昭二九）七九俵（昭三〇）一四五俵（昭三一）四一五俵（昭三二）五三七俵という様に著しい増収量であることがわかる。

品質について早期米を普通作米に較べてみると、二等が少く三等は一、三倍位であるが四等、五等となると二～四倍も多く、普通作に劣つている。この四等米五等米の原因は、胴割米と水分過剰米であるから、架干し、ムシロ干しの改善と能率的な通風乾燥によつて十分改善できる問題だ。

……

県では水稲の早期栽培を明年は更に七千町歩内外まで普及する計画であるが、特に既栽培地帯では稲作技術の指導と併せてあと地の高度利用と、新普及地には稲作技術の徹底的指導を図ることになつた。

ともあれ、この早期栽培の普及は、米の増収はもとより、本県農業の営農型態を、より総合的な発展の軌道に乗せるものとして、まさに〝農業革命〟の先駆とも云えるであろう。

出発前の蟹田衛生部長

県衛生部長も日本代表として

国際食糧農業機構 FAO総会へ（ローマ）

十一月二日からローマで開かれる国際連合食糧農業機構（FAO）総会に、本県の蟹田衛生部長は日本代表として出席することになり、去る十月二十九日羽田から空路ローマへ向いました。会議終了後はロンドン、コペンハーゲンを視察して十二月上旬帰国の予定です。

海を行くトラック

有明海の航送計画すゝむ

熊本県と長崎県は、有明海をへだてゝ呼べば答えるほどの間がら。ことに本県の長洲港と島原半島の多比良港とは、わずか十四キロ（三里半）しかありません。もしこゝがつなげるなら、産業、交通、運輸、その他すべての点にどれだけ有利か知れない、というのが「有明海自動車航送計画」つまり、フェリー・ボートと俗にいわれる計画のはじまりです。

この計画は各々両港に新しく船つき場をつくり、フェリー・ボートという特殊な構造の船を着けて、陸路を来た自動車やトラックをそのまゝ積みこみ、向うの港まで運ぶものです。

利害を同じくする熊本長崎両県では協議の末、建設省の協力を得てこの計画を進め、目下工事をいそいでいます。予定通りにいけば来年三月一ぱいに両港の施設をすまし、四月から運行をはじめることになるはずです。

フェリー・ボートの方は長崎市の太陽造船で建造中ですが、四五〇屯の鋼船で建造費一億七千五百万円は両県で半々に負担します。この船が両港の間を往復するようになつたら片道僅か四十四分しかかゝらないので、輸送時間は、これまでよりも五～六時間短縮できます。両県民にとつて大きな利益がもたらされることはいうまでもありません。

写真は長洲港の船つき場で、左方のコンクリート岸壁にフェリー・ボートが横づけされます。